

米軍占領下沖縄とボクシング

—本土復帰後の「ボクシング王国・沖縄」の歴史・文化的な 基盤を求めて—

大塚 李基

近年、日本のボクシング史が、社会科学分野を中心に注目を集めている。それらの焦点は、日本ボクシングと政治・文化・国際情勢などとの関わりである。こうした視点から日本ボクシングの研究が蓄積されているなか、これらのテーマと深く結びついてもおかしくない沖縄のボクシングが研究対象となることは、管見の限りでは、ほとんど見られなかった。それゆえに、本研究は沖縄のボクシングの考察を試み、なかでも、なぜ「ボクシング王国・沖縄」の言説が生まれたのかという疑問を軸に、歴史社会学的な視点としてアメリカのスポーツ社会学者のアレン・グットマン(Allen Guttman)のパーस्पекティブを参照していく。

以上の目的を達成するにあたり、本研究では、沖縄ボクシングの歴史と当時の沖縄をとりまく社会情勢を同時並行的に把握することが不可欠であり、それらの中長期的な視点で分析することが求められると考えた。したがって、戦前沖縄のスポーツ・体育史の把握と、戦後沖縄のボクシング史及び社会情勢の把握を、新聞資料(『琉球新報』と『沖縄タイムス』)及び文献をもとに調査し明らかにした。

そこでは、戦前の沖縄のスポーツ・体育は、明治政府や帝国日本主導の近代化によって普及・発展していく受容過程と、琉球カラテとボクシングとして「武道」や「武士道」を通じた結びつきが確認できた。また、戦後の沖縄スポーツ・体育では、米軍主導の統治政策が、沖縄住民の民主化や近代化を推し進める中、沖縄に駐留していた米兵により本格的な普及が図られたボクシングも、こうした影響を受け「近代化」の過程を歩んでいった。ただ、米兵主導のボクシングは、政治的にも文化的にも当時の沖縄住民に受け入れられることはなく約15年間、「数人の愛好家が行う競技」という位置づけであった。

1950年代後半に沖縄ボクシングの中心人物が米兵から郷土出身者に「交代」しても、その状況

が大きく変化することはなかった。しかし、1965年を境に沖縄ボクシングは質量ともに急激な成長を見せた。そして、当時の社会情勢を比較すると確かに1960年代に始まった「日本復帰運動」に呼応していた。だが、それ以前にもあった「島ぐるみ闘争」などの社会運動の時代ではボクシングは音沙汰がなかった。

以上の事実から明らかになったことは、沖縄のボクシングは社会運動と波長を合わせる時代もあればそうでない時代もあったことである。つまり、社会運動は確かに沖縄ボクシングの原動力となったが、グットマンの「7つの指標」でいうところの「スポーツの近代化」が完了していなかった頃の沖縄ボクシングは、その波に乗ることができなかったのである。そして、それは「スポーツの近代化」という基盤がなければ「ボクシング王国・沖縄」の言説誕生もなかったことを意味する。

本研究の後半では、「ボクシング王国・沖縄」が軍政とその後の後継者が主導した「スポーツの近代化」が基盤にあったことを踏まえ、グットマンが概念化した「匹敵戦略」をもとに1965年以降の沖縄ボクシングの考察を試みた。

ここでは、「匹敵戦略」として成立させる上で超えなければならない矛盾を、沖縄ボクシングも克服していた点や、「匹敵戦略」をベースに「ボクシング王国・沖縄」が衰退した要因についての回答を示した。具体的には、沖縄ボクシングの指導者が本土の大学で技術などを吸収し、また同時に差別された経験に対抗する姿勢も、沖縄のボクシングで生産した。そして、衰退要因とは「匹敵戦略」の匹敵するべき目標を「ボクシング王国・沖縄」という言説が誕生したがために失ってしまったことが原因であると考えた。

本研究で導いた「ボクシング王国・沖縄」の言説誕生の要因は、米沖日間の政治的、社会的な制約の中で進められた沖縄住民の近代化政策にボクシングも呼応し「スポーツの近代化」が成し遂げられた点を指摘する。そして、それを基盤として、1960年代以降に過熱化する日本復帰運動のうねりと呼応しながら「匹敵戦略」のもと「王国」となる競技力を形成させたと結論づけた。